

妙安寺だより

テレフォン法話 092(751)6084

上棟式(じょうとうしき=むねあげ)

『普請=ふしん』とは、家を建てることで、本格的な日本家屋の耐久年数はだいたい350年ぐらいで、今でも江戸

初期の寛永年間に建てられた民家が文化財に指定されて残されています。

家が350年以上もつということは、人間一代を50年と計算して、7代で一度建築すればいいことになります。

今、文化財指定の民家を見ると、使っている木材なども非常に頑丈なもので、永久建造物といってもいいぐらいで、また、建築費用も期間も現在では想像もつかないほどの一世一代の大仕事だったようです。

昔は、家を建てようとする山から原木を切り出し、木挽き(こびき)を雇って木を切り出し、その木を製材し乾燥させ、家を組み立てるように加工しなければなりません。

このように、たいへんな手数と費用と時間をかけるので、簡単に家を建てるというわけにはいきませんでした。

一軒の普請が出来上がると、地域中の人々が集まって2回に分けて、「普請祝い」をします。

最初が「棟上げ」といって、全体の柱が組み立てられて棟が上がったときに行ないます。

西洋では礎石をかためた日に「定礎式」を行ないます。

西洋の建築物は、レンガとか石を積み重ねれば、簡単に二階三階と出来ますが、日本の家は、通し柱といっ、長い木の柱を立てるのはたいへんなことです。

奈良の東大寺大仏殿の高さは、下の平屋根まで高さが、普通のビルの14階建てにあたり、使う柱も36本も立っている計算になります。しかも一本の柱の直径が約4mもあり、こんな大きな木をつないで、どうやって建てたのかたいへんなことでありました。

従って、日本には「立柱式」という建築用語があるくらい重要な技術なので、この柱の上に棟木が載ったことを讃えるために「上棟式」をするのです。

もう1回やるお祝いは、屋根を葺き終わって壁が乾いてから、初めて人が住んだ日に家が完成した披露をする。

これが「建築祝い」または「普請祝い」のことです。

なぜ、お祝いの餅を撒くのか？

「餅まき」というのは、人に物をやるのに投げるのは不衛生で失礼のような感じがします。

日本人は家の繁栄を祈って、家全体が餅だらけになり、米が満ち溢れるようにということから、餅を撒く信仰がありました。

昔からお祝いのときに物をまく習慣があり、節分に鬼を追い出すために豆を撒くのだと思っている人が多いようですが、実は、生活の豊かさを象徴するために豆を撒いて、満ち溢れることを祈るための儀式だといえます。

普請の時に、紅白の餅を撒いたり、子供のためにミカンやお菓子を撒いたりします。

江戸時代には、お金に金箔を貼って金色の寛永通宝を作って撒いたりしていました。これを「縁起銭」といって、一般の人々がそれを持っていると、その家と同じような普請ができると縁起をかつぐ大きな意味を持っていたのです。

お 願 い

平成20年度 護持会費

平成20年度の護持会費(護持会費 7,000円 墓地管理費 3,000円)の未納の方、納入よろしくお願いたします。なお、護持会の年度は、1月より12月になっております。

平成21年度 地涌の声功德主

平成21年度の地涌の声の功德主を募集しております。(1月 5,000円です)

1月・2月・6月・8月については申し込み済みです。ご希望の方は、希望の月と5,000円を添えてお申し込み下さい。

11月26日に予定していました「檀信徒勉強会」は、当日、福岡県檀信徒研修道場が開催されたり、18日は住職

手術、21日は市内の立正護法会などにより、日にちの都合ができませんので休ませていただきます。